

## 感性、物づくり、物語 — 共感の世界の広がり と 繋がりを考える — (全 12 回)

### 第 5 回 趣味判断と共通感覚 (1)

長島知正 (早稲田大学理工研招聘研究員)

「我感じる、ゆえに我あり」という言説は、「我感じる」ということを実証できないため、論理的な主張とはいえませんが、「我感じる」ということは「我あり」ということを裏付ける材料になります。「我感じる、ゆえに我あり」という言説を糸口に、私達の人間の本性としての深い感性を体系的に把握するための基盤を前回に引き続いて考えたいと思います。人間像を考えることが、我が国の課題の一つとも云われる、理系と文系の壁をこえるような思考に繋がっていけばと願っています。

#### 共通感覚とは何か

私達が「感じる」感じ方には少なくとも、感覚、感情、感性という3種類の異なる感じ方があると前に云いました。しかし、私達の感じるということには、「気配を感じる」、「自由な空気を感じる」と云ったようなことや、「違和感」とか、「自然な感じ」のように、上の区分に収まるか判然としない「感じ」が他にも未だあると思われれます。そのため、3種類という区別自体かなり便宜的なものです。区分けに説得力が欠けることは別にしても、「感じる」ということ自体は、私たちが生きる上で疑いようもなく基本的で重要な機能です。それにも拘らず、今までそこに焦点を当てられてこなかったことは想像して頂けるのではないのでしょうか。

今回連載のテーマは感性ですが、その仲間である感覚や感情を含め、私たちはそれらの素性をほとんど理解しませんでした。裏返して云えば、私たちは、そうした私たち自身の本性を極めて粗末に扱ってきたともいえる訳です。理系・文系間の壁についても、この辺りに大きな問題があるように思われれます。端的に理系・文系の壁の問題の一つをいえば、技術開発の実際を担う理系の人達

の中で、大学などを卒業するまでに「人間とは何か」といったことや人間の心理や感情に関わる講義等を履修して卒業する人は限られ、しかも年々減少していかないかということです。このような傾向は、独創的な見方の芽をつんでいないか気がかりです。我が国では、戦後の輸出立国から創造性技術立国へ転換がせまられている中で、創造的な技術こそが今まで以上に求められる今日、創造性教育の課題は国の盛衰に繋がる喫緊の問題ではないのでしょうか。

ところで、私達は誰しも外界の中で生きていくため、感覚器という装置を介して、通常五感と呼ばれる感覚を持っていることは体験から知っています。日常的には、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚を五感と呼んでいます。そして通常、感覚というと上記の五感の内の一つの感覚を指しています。現代は情報化時代と呼ばれていますが、現代のコンピュータによる情報化が“視覚優位”と云われるのもそうした例の一つと云えます。

我が国では、勘に頼った推測や直観による判断を「第六感」と呼ぶこともかなり広く見受けられますが、この第六感という言葉は日本発ではなく、意外なことにヨーロッパからの輸入の言葉です。例えば、「社会契約論」を通して近代西欧の誕生にも影響を与えたルソーなども、第六感という言葉を著書で使っています。ただし、我が国での直観という意味とは異なった「共通感覚」という意味で使われています。この共通感覚は、感覚とは云っても通常の生理学の文脈で学ぶ感覚ではなく、主に哲学の分野で議論されている“感覚”です。

共通感覚に関する議論は古く、また哲学の分野でも多様な広がりを持つ問題のようで、それを正面から取り上げる力は著者の及ぶものではありません。ここでは、「我感じる、ゆえに我あり」という表題に関連して、「美の判断」の問題に焦点を合わせた議論をします。具体的には、感性とセンスは互いに非常に相性が良いということを前に紹介しましたが、その話を掘り下げて、美の判断の話とつながるようにするつもりです。

まず、共通感覚とは何かですが、それは大雑把に云って、「常識」および五感を一つのまとまった感覚として統合する能力の二通りに分けられるとされます。

一つ目の常識は、社会の中で多くの人の間で共通した良識という意味を持ち、社会の共同性の成立にあずかるものです。もう一方の共通感覚は、個人の五感にわたって、それらを一つに総合してまとめ上げる能力ないし感覚を意味します。共通感覚についての、ひとまずの説明は以上ようになります。こうした説明の段階では、二つの意味は明確に異なっていて、多義語と考えれば特別珍しいものではありません。しかしながら少し立ち入ると、そこには古来の人間の様々な思考や思想の根が絡み付き、あたかも脳の内部を見るような思いがします。

と言う訳で、ここでは共通感覚それ自体について探るのではなく、具体的な感性の働きとして、人が美を判断するという問題を取り上げ、そこで共通感覚がどう関わるかを考えていきます。

### 美しいとは：美の判断

私たちは感性と云うものについてまだ定義していません。理由は後で説明しますが、今しばらくは、感性を定義しないまま進むことにします。そこで、感性をひとまず把握するために、感覚や感情と対比する形で、「感覚としての精神（こころ）」という言葉で惹くことと思います。感性という言葉がこのような意味で今後も使います。この意味の感性はセンスという言葉と大変相性が良いことも話しましたが、そこに、“理性のカント”が関わっているという意外な事も示唆しました。理性のカントと呼んだのは、おそらく哲学の関係者以外でカントの名を知っているのは「純粋理性批判」を通じてだろうと思われるからです。人間理性の限界を確立しようとしたカントが何故感性なのか、その種明かしを今回しようと思います。その前に、感性および共通感覚という言葉に関する注意しておく必要があります。これまでも、またこれから使う感性という言葉も、カントが純粋理性批判の感性論（Aesthetik）で使っている“感性”とは別な意味です。

この節に関係するカントの著書は「判断力批判」という、カントの3大批判書の最後に出版され、純粋理性批判とは別の著書です。ややこしいのは、カントは美の判断の問題をこの判断力批判の前半の主要テーマとして分析していま

すが、その著書の前半は Aesthetische Urteilskraft(判断力)と云う題が付いているからです。Aesthetisch は名詞 Aesthetik からくる形容詞で、Aesthetische Urteilskraft を感性的判断力と訳して良いはずですが、しかし、こうすると純粹理性批判と同じ意味ととられるため、こちらの Aesthetisch には、美的、審美的、美学的あるいは情感的という言葉が当てられています。つまり、前半部の題は美的判断(情感的判断)となります。共通感覚についても、翻訳の言葉遣いの問題が深く関わっていますが、それについては該当するところで説明します。

ところで、前半部で、扱う判断の対象は「美」だけではなく「崇高」についての判断も対象にしている事を考慮して、情感的判断と云う訳が最近は多いようです。

この判断力批判はカントが美や芸術の領域の問題について考えたことをまとめたもので、余り知られていないのではないかと思います。私自身、カントは理性の人で、「感性」といっても純粹理性批判にある感性論の程度の関わりしかないと思い込んで、判断力批判を読みませんでした。実際はそうではなく、私たちの感性にも大いに関わっている事を知って頂くため、判断力批判の前半部(第一部)の目次を表記します(カント著、篠田英雄訳、判断力批判(上)岩波文庫)。

## 第一部 美学的(情感的)判断力の批判

### 第一篇 美学的(情感的)判断力の分析論

#### 第一章 美の分析論。趣味判断の第一様式、第二様式、第三様式、第四様式

#### 第二章 崇高の分析論。A 数学的崇高について、B 自然における力学的崇高について

#### 美学的(情感的)反省的判断の解明に対する総注

#### 純粹な美学的(情感的)判断力の演繹

### 第二編 美的(情感的)判断力の弁証論

#### (第二部 目的論的判断力の批判)

ここでは、上記の中、美学的(情感的)判断力、特に美の分析論に注目しますが、目次に見られるように、崇高の分析論には、崇高といった感情を数学と

関係させて論じるなど、理系・文系の関係といった面からも気にかかる議論が数多くあります。

本題の美の判断に入りましょう。

カントは美の判断を趣味判断と呼びます。ここで趣味とは、日本語の意味と少しずれがあり、日本語で使われるホビーの意味ではありません。物事の味わいを感じ取る能力の意味と考えれば良いと思います。それは美について「趣味」を備えた人とカントが云っていることから推定されます。従って、カントは趣味判断の一例として、美の判断、つまり美を感じ取るという判断を考えています。一方、「趣味」、すなわち、物事の味わいを感じ取る能力とは感性そのものと考えることが可能です。だから、大雑把に云うと、趣味と感性の関係は並行的と云えると思います。

ここまで来れば、私たちの感性とセンスの相性の問題は決着させられます。つまり、センスは物事の微妙な感じを悟る働き・能力と云う意味で、趣味と意味が重なることから、感性とも結びつきが生まれるといえるからです。



さて、カントの美についての判断について、とりあえず、おおづかみな説明を試みましょう。まず、美の判断について考える時、美として、カントはどのようなものをイメージしていたのでしょうか、例を引用しておきます（「美と崇高なものの感情に関する観察」）。

花の咲き乱れる草原の景色、草をはむ家畜たちがそこか

しこに点在する、曲折に富む小川の流れる谷間、天国の  
叙述、ホメロスの描くビーナスの帯はやはり心地よい感  
覚をひきおこす。(中略) それらを享受するには、美し  
いものに対する感情を所有していなければならない。(中  
略) 崇高なものは揺るがし、美しいものはひきつける。

こうしたイメージを念頭に、カントはあるものを美と判断するとはどのよう  
なものかを考えます。ここで、判断とは、「○○は○○である。」と述定する働  
きのことです。従って、美の判断とは、例えば「これは美しい花である」とい  
う働きを指します。良く知られた判断には、客観的な判断として論理的判断が  
あります。しかし、この美の判断は客観的判断でないことは明らかです。つま  
り、私がこの花が美しいと感じたという、個人的な感情による主観的な判断で  
あり、客観的な判断とは全く異なります。

ところで、カントの美の判断の大きな特徴は、主観的な判断でありながら、  
その判断は他人にも同じ判断を要求する普遍性があるということです。この特  
徴は「主観的普遍性」と呼ばれています。

この主観的普遍性ということが如何にして可能になるか、カントは理由の一  
つとして、ある物事に美を感じることは、その事物が好きだからでも、何か利  
益になるからでもなく、そういった一切の関心を離れた、無関心な心を感じる  
「快」感情によるといいます。こういう美の特性を“美の無関心性”と呼ばれ、  
美学の古典とされています。しかし、こうした美の無関心性によって、私が感  
じるという主観性は消されたとしても、その判断を他人にも要請するという積  
極的な仕組は欠けているように思われます。

その仕組みと考えられるものとして、カントによって *Gemeinsinn*：合同感  
覚と呼ばれた感覚があります。この *Gemeinsinn* は *Sensus Communis* (*Sensus  
Communis*：共通感覚) という言葉と区別して使っているため、カント自身、  
二つは別の概念と考えていたと思いますが、*Gemeinsinn* = 共通感覚とする見  
解もあり、事態はかなり錯綜しているように思われます。この辺りになると素  
人には手が出ない領域になりますが、次回、もう少し立ち入って考えます。

※『感性的思考—理系・文系の壁を超える発想のために』（長島知正著，東海大学出版会）が刊行をむかえました。ぜひ手にとっていただき、本連載と合わせてお読みいただければ幸いです。